

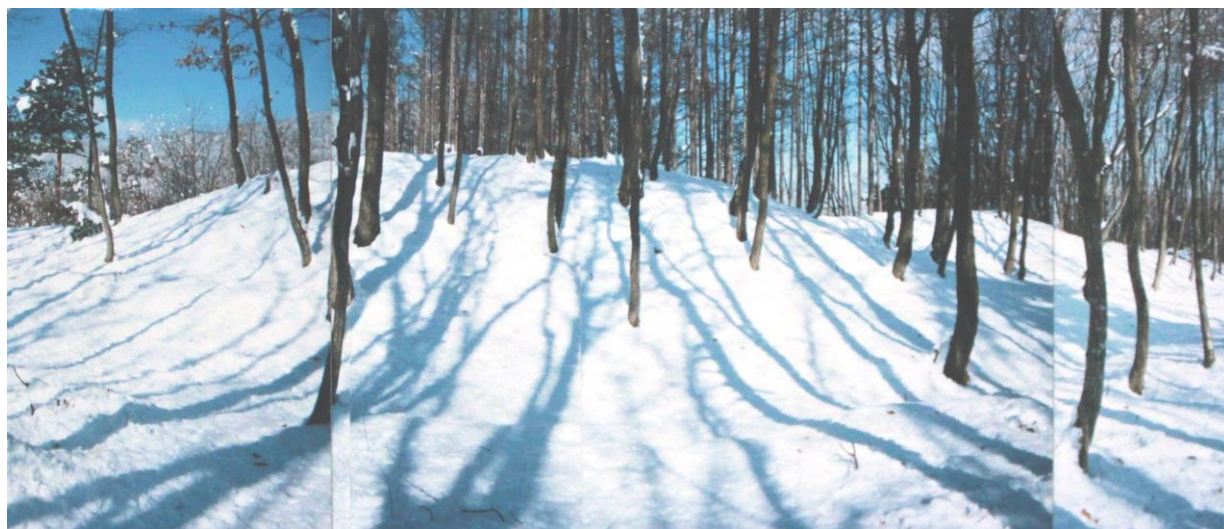
勸介山古墳等、北信濃北半の古墳時代前期古墳の地域的重要性について

松澤芳宏

1. 初めに

飯山市包含圏を示す北信濃北半とは奥信濃に代わる言葉として、筆者が提案した言葉です。奥信濃というと、風光明媚な観光地として情緒あふれる響きである一方、本雑誌に申し訳ないが、文化の後進地というイメージが纏わりついてしまいます。

若き頃、この地方の古墳文化は善光寺平南部よりも遅れ、古墳時代の中期や後期になってからだと学界では考えられていました。筆者は、その論法ならば、さらに北方の福島県会津地方もそのようになってしまうのではないかと、しかし会津には4世紀末前後築造とされる前方後円墳があるのではないかと、その矛盾に疑問を持ちました。



第1図 飯山市大字静間の勸介山古墳：平成7年撮影

勸介山古墳の名称は、武田信玄隊が飯山城を攻める時に、山本勸介がこの付近に陣を取ったとの伝承により筆者が名付けたもので、元禄8年静間村絵図に勸介山と記載されている為、最も古いこの地名を採用しました。なお、現在の地字は飯山市大字静間字勸助山となっています。

その疑問が、勸介山古墳を初めとする、飯山・中野地方の古墳時代前期古墳の数々の発見につながったわけであります。

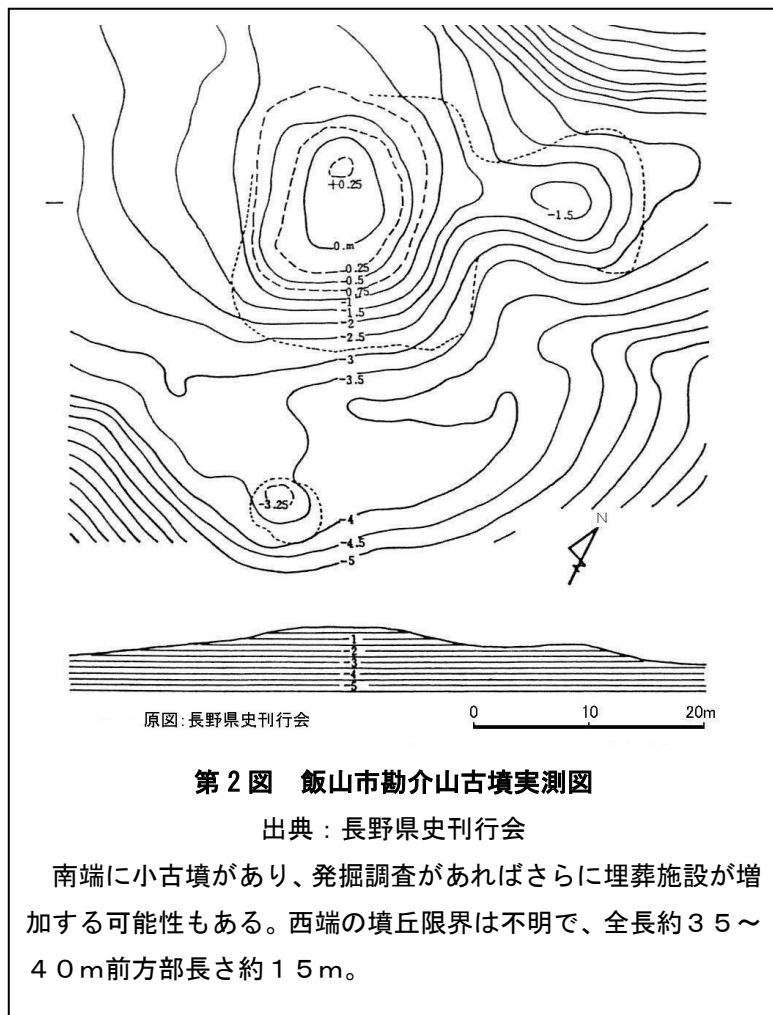
但し、発見当初、その年代観については、当時の最先端の年代観を取り入れて、上限を4世紀中葉として批判を浴び、前方後方墳という墳形自体も等閑視される事態となっておりました。しかし、令和の現在に至っては研究も進み、3世紀も年代の上限に加える状況となっています。

本稿では年代観の根拠を示すとともに、持論の世界性を持った古墳と古墳時代の定義を展開して、北信濃北半地域における古墳時代前期古墳（古墳前期ではなく古墳時代という枠の中の前期古墳）の成立の意義について考えて行きたいと思えます。

時代は邪馬台国と大和政権にかかわる時代であり、邪馬台国と対立する狗奴国の位置議論など古代史上の重要問題が背後にかかわってきます。

2、北信濃北半の前方後円（方）墳発見の経過

飯山市勘介山古墳の発見は筆者が中学生の時に遡ります。千曲川のほとりに各時代にわたる田草川尻遺跡を発見し、古墳時代の遺跡もあることを確認しておりましたので、そこを眺めるところの勘介山を踏査し古墳を発見しました。中学生の昭和35年ごろの事です。



ただし、形状は前方後円墳でもない不整形であったので、発表は控えておりました。

ところが成人になってから、松本市弘法山古墳（後年の研究で出土土器は廻間Ⅱ～Ⅲ式や布留0式併行期とされ、3世紀後半前後に比定されている）で、県内で初めて前方後方墳が発掘調査されたのを知り、勘介山古墳も前方後方墳ではないかと考えるようになり、昭和54年に新聞に前方後方墳として発表しました。

また、同時に中野市で前方後方墳の蟹沢古墳（全長約40m前後、前方部長さ18m前後）も発見し、同市高遠山古墳も檀原長則氏の以前からの発見により、田川幸生氏らと共に前方後円墳ないし前方後方墳であろうと県史刊行会の委託測量調査で確認しました。

のち、高遠山古墳は中野市教委の緊急発掘調査で古墳時代前期前半の

前方後円墳と確定しました。

さらに飯山市有尾1号古墳（第7図）・法伝寺2号古墳も前方後方墳の可能性のあるものとし、それらの成果を昭和55年と同57年、同58年に誌上に発表しました（注1～3）。

後年それを受けて、飯山市教育員会の法伝寺2号古墳の範囲確認調査、有尾1号古墳の実測調査があったわけですが、平成9年以降の市文化財審議委員会の公式発表には筆者の以前からの指摘が明記されていません。

前記したように、それらの前期前方後円（方）墳の年代上限については、昭和55年筆者論文では、当時の学界の北信地方最古の見解を上回り、4世紀中葉とし、古すぎると批判を浴びました。但し、平成期以降、年輪年代や年号鏡と土器の共伴関係など、学問の進展により3世紀も年代の上限に加える状況となっています。

年次をやや遡って、筆者は、昭和54年前後、長野県史刊行会の委託事業として勘介山古墳の測量調査も実施し、論文の一助にしておりましたが、発掘調査なしの状態であったので、学界からは等閑視されていました。

当時、北信地方の古墳文化は森將軍塚古墳（現在は4世紀中葉～後半に比定されている）など、前方後円墳が最大にして最古というのが常識であったため筆者の意見など聞く耳を持たない研究者もいました。

それから15年前後過ぎてから飯山・中野地方の前方後方（円）墳も古いものだという認識が深まり、平成6年に勘介山古墳は長野県史跡に指定されました。

それ以降は近隣の発掘調査が進み、飯山市法伝寺2号古墳が3世紀前半（月影Ⅱ式～）～4世紀初頭の前方後方墳（墳形の確認は注4）と判明しました。

さらに、中野市安源寺城遺跡で、前方部祖形型方墳（布留0～Ⅰ式併行期で3世紀後半～4世紀前半）・安源寺遺跡で小型前方後方墳（布留Ⅰ式併行期で4世紀前半前後）が発掘されました。

また、同市高遠山古墳は平成9年と平成11年に調査され、布留0～Ⅰ式併行期で3世紀後半～4世紀前半の年代（各古墳の年代観については注5参照）が考えられ、東日本最古級の前方後円墳と位置付けられるようになりました。

古墳時代以前の弥生時代では、ご承知の通り弥生中期末前後の中野市柳沢遺跡青銅器埋納遺構・同市南大原遺跡の弥生中期後半の鍛冶遺構と鍛造鉄斧の発掘、木島平村の根塚遺跡からは朝鮮半島製ともされる説もある渦巻文装飾付鉄剣などが発掘され、ようやく北信濃北半の古代文化の優位性が認められるようになりました。



3、北信濃北半の古墳時代前期前方後円（方）墳成立の意義と外郭地域との関連性

当該の勘介山古墳は長さ約40m前後・高さ3.5m以上の前方後方墳と推定されます。現在のところ、長野県内の古墳の総数が3500基を大きく上回る中で、前方後方墳は数10基であることからすると、きわめて特異な存在といえましょう。

現在、発掘により、小規模のものも含めると、増加する傾向があり、飯山市内では法伝寺古墳群・有尾古墳群に前方後方墳があります。

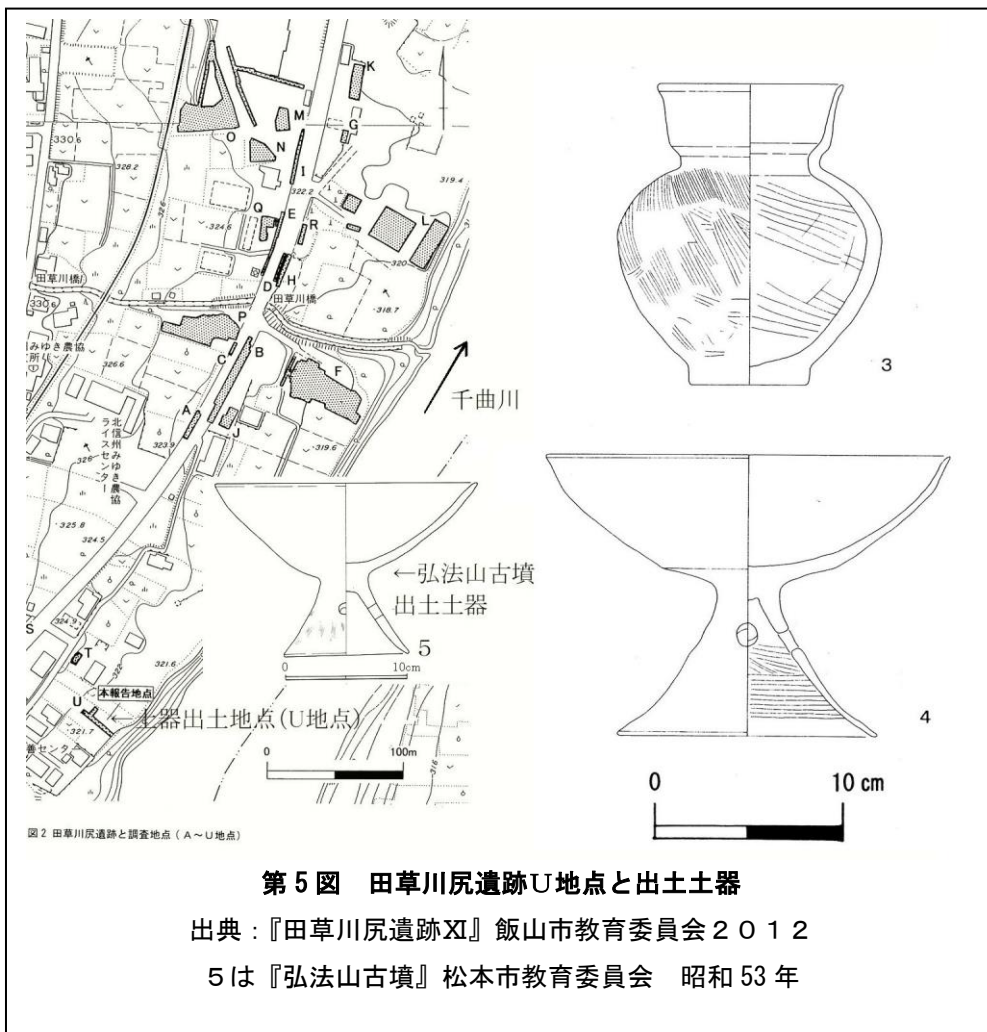
時代を古墳時代前期（3世紀中葉前後～4世紀後半）に限定してみると全国的には前方後方墳の数が多し、全長20m以上の古墳にこの墳形が多く採用されている

ことは、やや、身分の高い人達の墳墓といえましょう。

それ以下の身分の人達は、弥生古墳以来の低墳丘古墳や墳丘の無いお墓に葬られていました。勘介山古墳の南端に、この低墳丘古墳らしいものが見受けられます。この外、これと同様の小さい古墳が多数埋まっている可能性もあると思います。

なお、前方後円(方)墳等の墳形の発生期(前方部確立型古墳の範疇)は、**弥生時代後期後半～古墳時代初期**にあり、発生期(出現期)前方後円(方)墳は全長20～40m内外のものも多く、今後膨大な数に達するとみられ、前方後円(方)墳は大和政権等の巨大権力が直接関与したものが大半ではなく、統一政権に向かう**動乱時代の文化の波及現象**と認知されるべきものが多いでしょう。

大和政権が前方後円(方)墳の成立に関与したならば、地方においては最古の前方後円(方)墳が最大級の大きさをもつはずであり、昭和期の学問ではそのように恣意的に考えられていましたが、令和の現在では、そのような情勢になく、地方においてはむしろ最古級の前方後円(方)墳(前方部確立型古墳の範疇)が全長20～60m内外の規模をもつことが判明しつつあるのです(弥生時代後期後半の福井県安保山4号墳等)。



第5図 田草川尻遺跡U地点と出土土器

出典：『田草川尻遺跡XI』飯山市教育委員会 2012

5は『弘法山古墳』松本市教育委員会 昭和53年

また、それ以前の様式の前方部祖形型古墳はさらに規模の小さいものもあり、前方後円(方)墳が地方に到達する以前の文化波及現象と考えられるわけです。つまりいきなり大和政権なりの巨大政権が完成した前方後円(方)墳などを誇示したのではなく、それ以前から各地に於いて前方部の祖形から前方部の確立までスムーズに墳形の変化が認められるわけです(注6)。

勘介山古墳は前方部が未発達で小さく、様式的には、発生期前方後方墳かその系

列上にある前期前半の古墳と考えられます。ただし、詳細な時期については発掘調査を経ていないので明らかではありません。3世紀中葉前後から4世紀前半前後の範囲内のいずれかに該当すると推定します。また、内部構造は堅穴式石室・木槨・粘土槨・木炭槨・木棺直葬など、いろいろなケ

ースが想定されます。

勘介山古墳は、山側すなわち北西側よりも南東側の高さが大きく、谷側から見るように造られた古墳です。ここから見渡せる千曲川の沿岸地帯に古墳の被葬者や支配下の集落があったのでしょうか？想像が膨らみますが、古墳の被葬者が在地豪族のみとは断定できず、考古学の限界でしょう。

古墳時代前期は『魏志』倭人伝の邪馬台（やまと）国や、その後身かともいう大和政権（大和だけではなく外郭地帯の連合政権の可能性からヤマト政権と近来は書くのが通説ですが、大和を意識していることには変わりがない）の草創期に当たる時代であり、飯山地方が邪馬台国の勢力圏内であったのか、あるいは、対立する狗奴（くえぬ・くぬ・くぬ）国に属していたのか、古代史の重要な問題が飯山地方の古墳や集落遺跡が語ってくれます。

邪馬台国の時代やそれ以前から、千曲川流域から北関東には大陸や朝鮮半島の影響下にある金属器文化が育っていました。邪馬台国畿内説に準ずれば、山々の重なる畿内からの遠隔地でこそ、長く独立を保っていた狗奴国があったのかもしれませんが。従来の北関東説を援用し、大陸文化の受容の確認から、千曲川流域包含圏をも加えることが今後の課題でしょう。

なお、先に記したように、勘介山古墳の南方に近接して、平坦部端に小古墳とみられるマウンドがあります。これは、会津坂下町周辺（注7）や全国各地参照の、主墳の周囲に見られる小古墳の密集を示すものです。私の言う前方部付設型古墳（注8）の諸形態が出現するかもしれません。

現在、勘介山では一か所しかありませんが、各地の例から地中には墳丘を流失した小古墳が多数存在する可能性があるため、勘介山古墳は単独墳ではないと思います。

さらに飯山市内では、近隣の静間の法伝寺古墳群や飯山北方の有尾古墳群にも主墳の周囲に数か



第6図 神明町1号古墳の現状（全長約40m前後の前方後円墳？）西方より望む。

所のマウンドが認められます。さらに多数の小古墳が地中に没しているかもしれません。会津坂下町では古墳群は古墳時代前期が多いようです。

因みに、法伝寺2号古墳（第4図）については、平成8年、筆者も同行した秋津ふるさとづ

くり委員会史跡探訪の折に、墓地整備事業に関連することが会員により判明し、飯山市教育委員会に調査の必要性を依頼し、外周が発掘調査され、前期前方後方墳であることが判明しました（報告書では推定全長約23m 前方部長さ9.5m、半壊以前の私の測量値では全長25m）。

出土土器は北陸の弥生時代後期末の月影Ⅱ式土器を含み、土器の数が少ないので慎重に考えても、

3世紀前半～4世紀初頭のいずれかが法伝寺2号古墳の築造年代と考えられます（注9）。

つまり、東日本最古級の前方後方墳である可能性があり、松本市弘法山古墳（庄内Ⅲ式・布留0式や廻間Ⅱ～Ⅲ式併行期）に匹敵するか、それ以前の可能性がある古墳です。

この年代は勘介山古墳の年代推定に有意義であり、最古級の墳丘形態により勘介山古墳もそのような古さになる可能性もあります。

また、飯山市でも勘介山・法伝寺2号墳・有尾1号墳の各古墳が古墳時代前期に所属するとみられることから、福島県会津包含圏地域と同じく飯山市に古墳時代前期のまとまった古墳群がある可能性が大です。

有尾1号古墳（全長35m後方部径22m）の周囲には、現状では方墳系の古墳もあり、古墳時代前期に方墳が多いことから、古墳時代前期古墳群であることが疑われます。

また、法伝寺1号古墳の現状は径約26×22mの方墳ですが、周囲が後年に削平されていることから、全長50m前後の前方後方墳もしくは前方後円墳の可能性もあります。こちらが主墳であると考えられ、2号墳や周囲のマウンドが従属した小古墳の可能性もあります。



第7図 飯山市有尾1号古墳

前方部が極小の前方部確立型前方後方墳と推定され、形態では中野市高遠山古墳、松本市弘法山古墳以前のスタイルです。上限は3世紀、下限は4世紀前半前後。昭和55年前後に撮影。

重要なことは会津地方と飯山地方が日本海地方と太平洋地方を結ぶ地溝帯という点で、相似た地理的要件を満たしていることです。『古事記』・『日本書紀』を参考にすると、崇神天皇（通説では3世紀後半～4世紀前半ごろが在位）の時代、四道将軍の大彦命（おおびこのみこと）が北陸を、子の建沼河別命（たけぬかわわけのみこと）（武沼川別）が東海を征討し、出会った所が「相津（会津）」という説話が載っています。

特に北陸道からの玄関口という会津地方と似たような地理的状況化にある飯山地方が、共に前期古墳の密集地帯という点で、古代史上重要な地域であることは

間違いないでしょう。このような状況下で勘介山古墳が土着の豪族の古墳か、また、大和政権の派遣部隊に関する古墳か、予断を許さない状況でしょう。

因みに、勘介山眼下には各時代を通じての田草川尻遺跡があり、遺跡の北端と南端に弥生時代後期末～古墳時代前期の遺跡が確認されています。第5図は勘介山古墳東側真下に展望できるU地点と出土土器です（注10）。

3は北陸系の弥生後期末の月影Ⅱ式壺形土器、4は北陸の古墳時代前期の白江（しらえ）式～古府クルビ式併行の高坏形土器で、東海地方の廻間（はさま）Ⅱ～Ⅲ式高坏との関連性が指摘されている土器です。5の弘法山古墳出土高坏と類似性があります。

これらのU地点出土土器の実年代は3世紀前半～4世紀前半を前後する時期とみられます。今後勘介山古墳築造年代を考慮するうえで、欠かせない土器です。U地点は千曲川の攻撃面に近く、本来は現在の河川敷に弥生時代末期～古墳時代初頭の集落が広がっていたとも考えられます。

ここまで、勘介山古墳・法伝寺2号古墳・有尾1号古墳等、現在判明している前期古墳について述べてきましたが、このほかに神明町裏山に古墳時代前期以降の古墳群らしきものもありますが(神明町古墳群)、後世の攪乱があり、断定できないでいます(注11)。

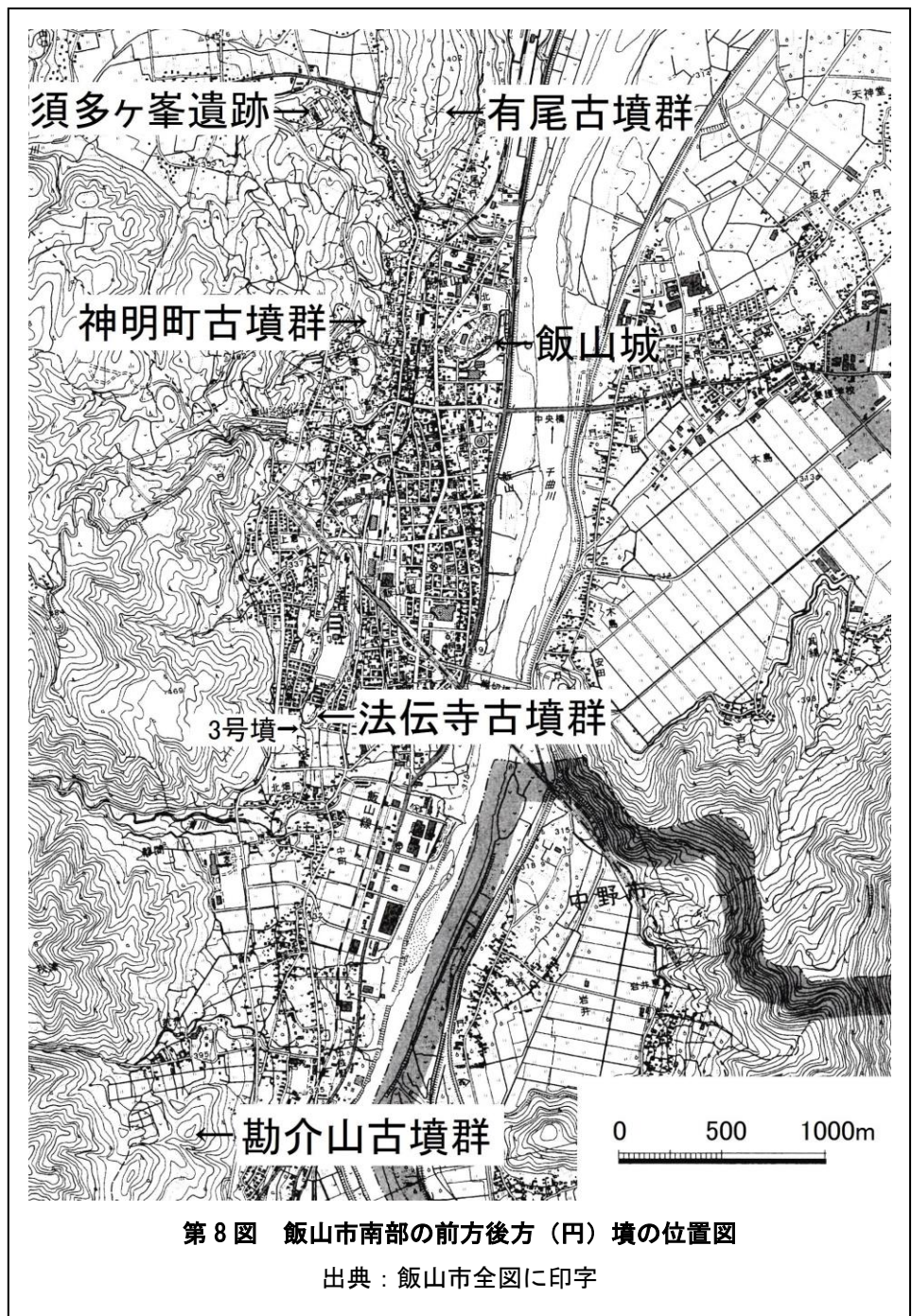
古墳群は飯山城跡を東に望む狭い尾根上に、南から前方後円墳・前方後方墳・方墳(円墳?)・円墳の候補として並び、1~4号墳と呼称します。

1号古墳(第6図)は全長40m前後の前方後円(方)墳状ですが、前方部の墳頂平坦面がやや広すぎ、後円部の墳頂平坦部が径7(主軸)×5mと狭い点、後世、前方部が建物の敷地になった可能性もあります。北側に丘尾切断方式の溝が確認されることと、西方から南方にかけての墳裾に犬走状の平坦面があることは、前方後円墳の可能性も残すことになります。後円部南東側は削平地として壊れています。

2号・3号墳は開墾が及んでいるため、現状が本来の形状か不明ですが、一応数値を掲げてみます。2号古墳は全長27m、後方部16.3(主軸)×1.4m、高さ2.5m前後、前方部幅5~6m、高さ0.7mの前方後方(円)墳(?)。後方部に7×5mの墳頂平坦部があります。後方部と前方部の境に浅い溝があり、単独の古墳となる可能性もあります。3号墳は径17m高さ1.5mの方墳か円墳ですが、形状が不明確です。

4号墳は、径20m高さ2mほどで、周溝のある円墳を呈していますが、昭和20年代後半に短小な短冊形銅板経が多数発掘され、かつて飯山北高に保存されていました。同時に、弥生時代末期

7



第8図 飯山市南部の前方後方(円)墳の位置図

出典：飯山市全図に印字

から古墳時代にかけてのものとみられる無文土器片が、数点発掘されているとの情報が確認されま
す。4号墳は古墳の経塚利用と考えられます。

神明町古墳群は学術調査が無いため、断定できませんが、群集していることなど、古墳群の可能
性があります。確認調査が必要です。

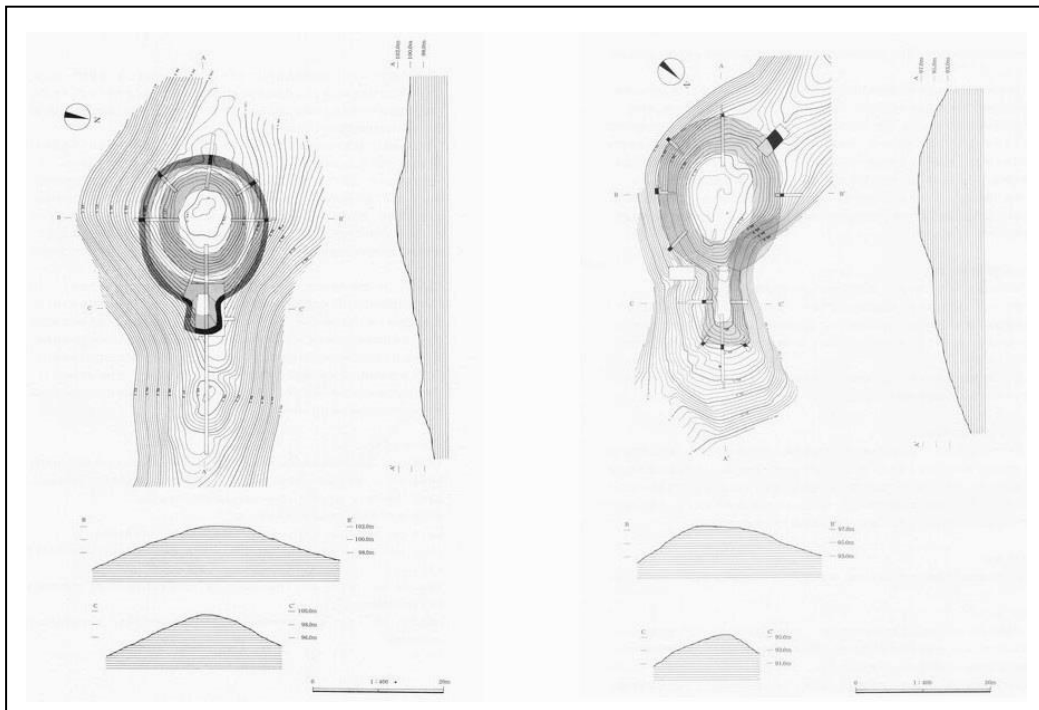
飯山市南半の前期古墳群と集落遺跡については、勘介山古墳と眼下の田草川尻遺跡北端と南端・
法伝寺古墳群と眼下の郷谷遺跡・神明町古墳群と眼下の水田耕作可能な低湿地帯・有尾古墳群と皿
川と千曲川流域の集落推定地帯。弥生後期後半の須多ヶ峯方形周溝墓（弥生古墳）と須多ヶ峯古墳
時代前期集落など、長さ5 km前後地帯に遺跡が密集しています。

断片的には神明町1号古墳西側の雨池付近に古式土師器、法伝寺古墳群西方の北畑牧草地遺跡(松

尾遺跡) に古式
土師器等が発見
されています。

このベルト地
帯が沓掛・沓津
地名を残す斑尾
山東麓の古代交
通路に通じ、か
つての越の国と
日本海に通じて
います。

もちろん、南
西方面は中野
平・善光寺平に
通じ、令和5年
に確認された全
長80 m前後の
長野市將軍山前
方後円墳（私見
では前方部確立



**第9図 妙高市観音平古墳群の前方後円墳。左は1号墳 全長26.8m。右は4号墳 全
長33.6m。出典：妙高市教育委員会生涯学習課 斐太歴史の里：観音平・天神堂古墳
群（ウェブ）。**

型古墳から前方部長大型古墳の過渡的様相を示し、下限は4世紀、上限は3世紀後半前後に遡る可
能性もあります）を含む古墳時代前期古墳の密集地帯に通じます。

現在のところ、飯山盆地では千曲川の西方丘陵に古墳時代前期古墳が多く、しかも周辺に集落遺
跡を伴っている現象をどのように見るか、課題が残ります。

関連して、新潟県頸城地方では、最近、前方部確立型古墳の範疇を含む前方後円墳が5基発見さ
れています（注12）。いずれも全長約30 m内外の規模です。

そのうちの一群は、頸北歴史研究会により頸城平野北部の上越市吉川区町田で前方後円墳3基(最
大の1号墳は全長30 m) を含む仮称町田古墳群が発見され、海岸線より6 Km 内陸の尾根上を中
心に位置するとされています。但し、他の情報の異論もあり、前方後円墳3基の中に、前方後方墳
が含まれているのか後考を待ちたいと思います。

一方、妙高市観音平古墳群で前方後円墳 2 基が発見されています（第 9 図）。このうち観音平 1 号墳は墳形比率では前方部祖形型古墳に近い様相を見せますが、実測図では周溝が一周するように見えることから、前方部確立型古墳に属するか後考を待ちます。1 号古墳は 4 号古墳以前のスタイルで、私見では、上限は 2 世紀末前後の古墳である可能性もあります。

4 号墳は典型的な前方部確立型古墳でしょう。上限は 3 世紀前半前後、下限は 4 世紀前半前後の年代を示しています。同様な前方部確立型古墳の飯山市法伝寺 2 号古墳（前方後方墳）の年代観が参考になります。

ちなみに、頸城地方・北信地方の前期前半の前方後円墳の成立をヤマト政権の関与したものとするかどうかは断定できず、弥生時代後期の円形弥生古墳の流行が長野県や北関東包含圏の特徴的な



第 10 図 飯山市秋津地区史跡位置図

現象であることから、円形弥生古墳の影響が、中野市高遠山古墳（上限は 3 世紀後半、下限は 4 世紀前半）の成立に関与しているのではないかと以前から指摘していました（注 8 に同じ）。

因みに円形弥生古墳の密集地帯が瀬戸内と畿内、そして長野県と北関東にあることは、いち早く大陸の円墳流行に影響された現象であり、邪馬台国・狗奴国の 2 大政権が統治していた地域なのではないかと想像されます。

観音平 1 号古墳・4 号古墳の墳形は（第 9 図）、同じ前方部確立型前方後円墳でも前方部が極端に短小で、墳形のうえからは高遠山古墳以前のスタイルです。

まさに新潟県南部・長野県北部地方でも、私の言う前方部付設型古墳の発展形態のモデル地域となっていることは間違いないでしょう。

古墳時代前期には新潟県頸城地方と飯山市域・中野市域・善光寺平が、斑尾山東麓古代交通路や

関田山脈の各峠道と千曲川流域古代交通路を介して繋がりをもっていたことは明らかであります（注13）。

この現象をヤマト政権の版図（はんと）の拡大化があったとみるか、あるいは版図の拡大化志向に伴う動乱時代の1現象とみるか分かりません。いずれにしても頸城地方・飯山・中野・善光寺平を結ぶ路線沿いこそが古墳時代前期の文化地帯と断定できると思います。

4、おわりに

以上、飯山地方は決して古代文化の後進地ではなく、全国的な文化の波及現象の中にあることがお分かりいただけたと思います。飯山市の古墳時代前期古墳群については地主さんや地域住民の協力により清掃活動が進んでおり（注14で一部の活動について紹介）、さらに、法伝寺2号古墳（位置は注14参照）のように芝生を張る等の施策と整備活動が、見学者のためにもなり、他の前期古墳群に対しても、なお一層のご配慮を願うところであります。

各古墳の位置関係についてはウェブ上の飯山市教育委員会の飯山市埋蔵文化財地図を参考にされたく、秋津地区については概略、筆者の絵地図（第10図）を参考にしてください（注15）。

近来、弥生墳丘墓・古墳時代においても墳丘墓等の用語が蔓延し、世界の古墳においても墳丘墓等として、日本の前方後円（方）墳に依拠した古墳を所謂古墳とした向きがありますが、これは言語学に反した不適切な表現と以前から主張していますが、一向に筆者の学説に依る人が現れません。

友人にそのことを問いかけると、**的が大きすぎる（著名学者の通説に反抗できないし、日本史上の大問題）**との返答が返ってきました。それが全国的にも現在の状況であると認識していますが、筆者の説への忌憚のない反論を期待するだけです。

飯山市包含圏では、平野部の広さから、全長100mに近い大きな前方後円墳は成立しませんでした。したがって、文化の後進地地帯ではありません。

それどころか、これまで述べてきたように古墳時代前期前半前後に比定される前方後方墳が3基も確認され、さらに前方後円墳・前方後方墳の候補地が存在するなど、古代史を学ぶ格好の場所が飯山地方でありましょう。今後さらに古墳群周辺の確認調査を期待したいと思います。

なお、本稿では、墳丘墓表現は一切使わず、古い時代の世界の墳を古墳として扱い論を進めました。これについては、本雑誌41号にも、概略説明しました（注16）併せてご批判のほどをお願いいたします。

なお、頸城地方の天神堂古墳群・観音平古墳群については、筆者は昭和55年論文（注1に同じ）に古墳時代前期古墳の存在の可能性を説いたことは自負できますが、当時、畿内政権（ヤマト政権）の版図の拡大化現象を強調したことは、反省すべきと考えています。

近時、頸城地方・北信地方の古墳時代前期古墳群の存在がクローズアップされて、古式前方後円墳の存在など、ヤマト政権の支配を断定する向きもありますが、今は、ヤマト政権・土着民富裕層のいずれとも決しがたい状況と私は見ております。皆様のご指導ご鞭撻をお願いする次第です。

参考文献

注1 松澤芳宏「北信濃北半における前方後方墳の発見とその意義」、『高井』52号、昭和55年。

注2 松澤芳宏「有尾古墳群・勘介山古墳」長野県史『主要遺跡（北東信）』昭和57年 1982

注3 松澤芳宏「飯山・中野地方の前半期古墳文化と提起する諸問題」『信濃』35-3 昭和58年。

注4 飯山市教育委員会『法伝寺2号古墳』1997。

注5 松澤芳宏「古墳の定義と墳丘墓名称の廃止について（北信濃北半を例として）」『信濃』59の2・2007。

注6 注5に同じ文献で**前方部付設型古墳の発展形態（弥生時代から古墳時代前期の古墳の変遷）**を図示しました。通説の墳丘墓とするものも含まれていますが、統一して古墳とする立場をとっています。日本の古墳時代は全長80m以上の大きな古墳が複数出現してからと定義しました。いわば大古墳時代が古墳時代であります。古墳時代以前の古墳は弥生古墳となりますし、世界の古代社会や古い時代の墳（盛り上がった墓所）が古墳となります。

前方後円（方）墳という形状の確立が前方部確立型古墳に該当しますが古墳の成立ではありません。前方部祖形型古墳の分類に属するものは前方後円（方）墳ではありません。また、奈良県箸墓古墳や会津坂下町の杵ガ森古墳は前方部長大型古墳であり、箸墓型古墳はふさわしくなく、前方部が長大化する文化の流れの中にあると位置づけます。

また、A型・純陸橋型古墳からD型・前方部長大型まで、スムーズに変化するわけではなく新旧逆転する場合があります。あくまでも大きな流れです。

注7 会津坂下町『会津坂下町史 第四巻』資料編I 考古、平成29年。4世紀前半とされる前方後円墳の**杵ヶ森古墳**（前方部長大型古墳）とそれを取り巻く数々の前方部祖形型方墳・前方部確立型前方後方墳が紹介されており、その他多数の古墳時代前期以降の古墳を紹介している。

注8 注5に図示したほか松澤芳宏「中野市高遠山古墳と前方部確立型古墳の展開」『高井208号』2019・8・1刊行で詳述。

注9 松澤芳宏「飯山市静間の法伝寺二号古墳の年代推定」—東日本最古級の前方後方墳の可能性について—『高井第205号』2018・11・1刊行。

注10 飯山市教育委員会『田草川尻遺跡XI』2012。

注11 注3に同じ

注12 荒川隆史「新潟県の動向」（2020年度の日本考古学界）『日本考古学年報73（2020年度版）』一般社団法人日本考古学協会2021。妙高市教育委員会生涯学習課 斐太歴史の里：観音平・天神堂古墳群（ウェブ）。

注13 一志茂樹氏は「信濃と越とを結ぶ古代の幹路」第Ⅲ次信濃15の10、1963で延喜式東山道支路以前の北信地方の古代交通路を推定しました。本稿はそれに準じて考古学的考察で氏の説を援護しました。

注14 松澤芳宏「水梨子沢カタクリ鑑賞会・勘介山古墳学習会」『信州の自然に生きそして学ぶ2016』第64回長野県公民館大会資料・社会教育実践集第35集掲載の参考資料2016。

注15 松澤芳宏作成、『秋津地区史跡位置図』平成末年前後に作成。

注16 松澤芳宏「古墳とは何か？世界性をもった古墳定義の提唱」『奥信濃文化第41号』2023。

（まつざわ・よしひろ 飯山市秋津地区在住）